

日本における海外ドラマの評価要因の研究

二羽恵太
九州大学
ehfar.jj@gmail.com

金大雄
九州大学
dwkim@design.kyushu-u.ac.jp

星野浩司
九州産業大学
hoshino@ip.kyusan-u.ac.jp

キーワード: 海外ドラマ, テキストマイニング, ソーシャルメディア

1 はじめに

現在、アメリカを初めとして日本でも動画配信サービスが台頭しており、それに伴い第三次海外ドラマブームが到来している。また日本では若者のテレビ離れにより、年々視聴率が低下している。視聴環境の変化や世界有数の映像コンテンツである海外ドラマの特徴の移り変わりにおける、現代視聴者の意識を明らかにすることは、十分に有意義なことであると考えられる。本研究では、テキストマイニングを使用することで、第三次海外ドラマの評価要因を抽出する。さらに作品間で比較分析を行い、視聴者が求める要素を一般化することを目的とする。

2 研究背景

アメリカのメディア業界では1990年代から2000年代にかけて、地上波テレビからケーブルテレビへと主要媒体の大変革が起き、それに伴い第一次、第二次海外ドラマブームが巻き起こった。2010年代に入ると、動画配信サービスが急速に普及し、再びメディア業界に再編の波が押し寄せ、第三次海外ドラマブームが訪れる。世界市場でも高い評価を得ている海外ドラマの中で、第一次、第二次作品にはジャンルやテーマに明確な共通点が見られた。しかしながら、第三次作品には表立った類似点は見られておらず、視聴環境のみならず作品内容にも変化が現れている。

一方、日本メディア業界では設立当初から今日に至るまで、地上波テレビが主流の視聴媒体となっている。そうは言うものの、2000年以降、インターネットの普及率の増加やスマートフォンの登場の影響による、若者のテレビ離れが問題視されている。視聴率が年々低下し、テレビ局は数字を確保しようと躍起になった結果、番組は画一化が進み、質も低下していったため逆に視聴者が離れていくという悪循環が起こっている。依然として地上波テレビが視聴媒体の中心ではあるが、動画配信サービスの市場規模は年々増加しており、ライフスタイルの多様化による影響が着実に高まっている。

3 研究目的

そこで本研究では、多様化するメディア社会で過ごす現代の視聴者が、第三次海外ドラマに求める要素を明らかにすることを目的とする。テキストマイニングを利用することで、インターネット上における大量のテキストデータから評価要因を抽出し、作品間における比較分析により共通項を導き出す。

また、日本におけるテレビドラマの制作・流通システムはアメリカとは大きく異なるが、その環境下においても無理なく導入できるかどうかを考察し、実制作に活かすことのできる指標を示す。

4 研究方法

ある媒体から大量の自由回答文を収集し、テキストマイニングによって映像コンテンツに対する視聴者の解釈を明らかにする手法は、様々な研究において取り入れられてきた。妹尾(2007)は、2005年の日本のテレビドラマを対象にテキストマイニングを行い、視聴率に影響する評価要因を明らかにした。しかしながら、分析工程において対象を分類する際に文章を最小の文脈にしたため、評価要因の意味内容を放棄してしまい、実際の制作現場には活かせない。また分類内での要素を求めているものの、分類間での共通項は明らかにされていない。

本研究ではソーシャルメディアから感想データを収集することのできるクラウドサービス型テキストマイニングツール「見える化エンジン」を利用する。インターネット上における49種類のブログから、直近1年間の感想データを取得し、分析を行う。対象は、雑誌やレンタルショップ、動画配信サービスにおける海外ドラマランキングを参考に10作品選定した(表1)。

表1 テキストマイニング対象作品

タイトル	日本公開年月
ウォーキング・デッド	2012年2月
glee/グリー	2011年2月
ゲーム・オブ・スローンズ	2013年7月
アンダー・ザ・ドーム	2014年4月
ブレイキング・バッド	2010年6月
ホワイトカラー	2011年10月
エージェント・オブ・シールド	2015年1月
SUITS/スーツ	2013年9月
ハンニバル	2014年11月
ハウス・オブ・カード 野望の階段	2014年6月

5 実証実験

2016年10月1日から1年前までの感想データを遡り、約15,000件、収集してテキストマイニングを行った。

5.1 第一工程

各対象における頻出形容詞上位10単語を中心にクラスターリングを行った(図1)。

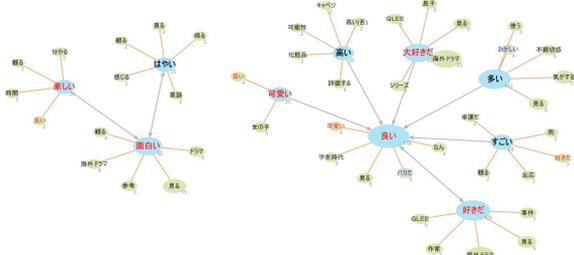


図1 『ウォーキング・デッド』における頻出形容詞10単語を中心としたクラスターリング

5.2 第二工程

各クラスターの係り受け単語からテキストの詳細を掘り下げ、評価要因として抽出した(図2)。その際、意味内容が十分に理解できるよう書籍に掲載されている作品紹介やあらすじを参考に解釈した。

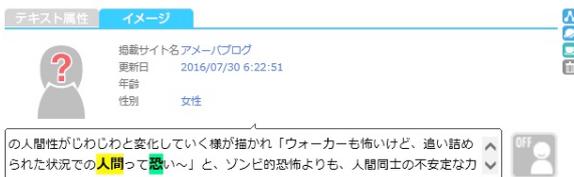


図2 『ウォーキング・デッド』における「人間」の係り受け「怖い」のテキスト詳細

5.3 第三工程

各対象から抽出した評価要因をまとめ、5作品以上に該当したものを共通項として導出した(表2)。

表2 評価要因の共通項

評価要因	該当作品数
好まれるキャラクター	10 作品
動画配信サービス	10 作品
特定のジャンル	9 作品
話題性に富む作品	9 作品
クオリティの高い作品	8 作品
多種多様なキャラクター	6 作品
迫真の演技力	5 作品
展開の速いストーリー	5 作品
濃密な人間ドラマ	5 作品
過激な描写	5 作品

6 考察

検証の結果、21種類の評価要因の中で10種類が共通項として現れた。ここで、日本の制作・流通面を考慮した上で再度、意味内容を掘り下げ、一つの指標を示すために考察を行った。

「好まれるキャラクター」では、強い目的意識を持つが、そのためなら手段を選ばないという二面性が条件の一つとしてみられた。『ウォーキング・デッド』の主人公リックは、保安官という職柄、仲間から信頼されるリーダー的存在で、正義感に満ち溢れていた。しかしながら、ゾンビが蔓延る世界となつてからは、仲間を守るためなら人も殺めるといふ、従来の王道的主人公像では考えられない行動を取るようになる。『ブレイキング・バッド』や『ハウス・オブ・カード 野望の階段』における主人公も、目的を達成するためなら平気で嘘をつき、裏切り、復讐する。一方、天才的な頭脳を持った格好いい(可愛い)キャラクターも視聴者の心を掴んでいたことがわかった。刑事ドラマの『ホワイトカラー』や法廷ドラマの『SUITS/スーツ』で全く同じ要素が見られる。

ここで、日本では刑事ドラマというジャンルが定番化しており、事件解決のために度が過ぎた調査を行う警察官や、頭脳明晰で爽やかな捜査官といったキャラクターを登場させやすいため、十分に制作に取り入れることができると考える。以上のように、各共通項に対して考察を行った。

7 まとめ

本研究では、第三次海外ドラマの評価要因を明らかにするため、選定した10作品を対象にテキストマイニングを行い、現代視聴者のニーズに合う要素を抽出した。さらに作品間での共通項を導き出し、意味内容を掘り下げていくことで、日本におけるテレビドラマの制作現場にも活用できる指標を、「キャラクター」、「ストーリー」、「作品」の3つの枠組みから示した。

今後の展望として、この後日本に上陸する作品にも類似点がみられるかどうかを検証していく必要がある。また近年の日本ドラマを対象にテキストマイニングを行い、海外ドラマに求める評価要因とどのような相違点が見られるのかを明らかにしたい。今後、動画配信サービスの普及によるメディアの変革によって、日本のテレビ業界がどのような影響を受け、どのように対応していくのか動向を探る必要がある。

参考文献

- [1] 西田宗千佳 (2015) 『ネットフリックスの時代 配信とスマホがテレビを変える』 講談社.
- [2] 池田敏 (2016) 『「今」こそ見るべき海外ドラマ』 星海社.
- [3] 尾紗恵 (2007) 「テレビドラマの構造化と評価要因の分析 自由回答文のテキスト解析による分析と解釈」 『KEIO SFC JOURNAL』 Vol.7, No.2.
- [4] 冬野美晴 (2011) 「内発的動機づけを促進する映画教材選択のための指標-テキスト型データマイニングによる分析-」 『九州英語教育学会』 第39号.